

浅川扇状地遺跡群

駒沢新町遺跡 II

— 長野電鉄上駒沢住宅地(2)造成事業に伴う発掘調査 —

1993・3

長野市教育委員会

序

社会生活の変化と共に「物の豊かさ」から「心の豊かさ」が求められる今日、文化財は現代人の心の糧として欠くことのできぬ、貴重な国民的財産であると考えます。

特に埋蔵文化財は、直接大地に刻み込まれた歴史であり、当時の物質文化のみならず信仰・宗教等の精神史など、文化の始源をも内包する基準資料であり、埋蔵文化財そのものが歴史・文化を考えるうえでの実証者といえましょう。

このたび長野電鉄上駒沢住宅地（2）造成事業に伴い、浅川扇状地遺跡群駒沢新町遺跡の発掘調査を実施いたしました。

事業予定地周辺は過去の調査で重要な埋蔵文化財が発見されており、古代史研究上注目されていた地域であり、今回の調査でもそれぞれ多大な成果が得られました。

本書はその成果を要約し、長野市の埋蔵文化財第55集として報告するものです。この報告書が地域古代史の解明や文化財保護の一助として、学術的に関係各方面に広くご活用頂ければ幸いに存じます。

最後に発掘調査から報告書刊行にいたるまで公私にわたり多大なご援助・ご指導を賜りました関係諸機関ならびに各位に心からお礼申し上げます。

平成 5 年 3 月

長野市教育委員会

委員長 奥村 秀雄

例 言

- 1 本書は長野電鉄上駒沢住宅地（2）造成事業に伴い実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 調査は長野電鉄株式会社 取締役社長 神津昭平の委託を受けて、長野市教育委員会が実施した。
- 3 調査地は長野市上駒沢字新町383-1他に位置する。
- 4 本書は矢口の指導のもとに千野が執筆・編集した。
- 5 調査によって得られた諸資料は長野市教育委員会（長野市埋蔵文化財センター）で保管している。
- 6 遺構の測量は（有）写真測図研究所に委託し、コーディックシステムにより1：20の縮尺で基本原図を作成し、本書では基本的に1：80の縮尺に統一してある。ただし遺物出土状況等微細を要するものに関してはこの限りではない。
- 7 遺物実測図に関しては基本的に土器1：3に統一してあるが、その他のものについては適宜縮尺を明示してある。

目 次

序	
例言	
第1章 調査経過	1
1 調査に至る経過	1
2 調査体制	1
第2章 調査地周辺の考古学的環境	3
第3章 調査	5
1 調査概要	5
2 遺構と遺物	5
3 調査のまとめ	11

挿 図 目 次

図1 調査地ならびに調査地周辺の地形	図7 3号・4号住居址実測図
図2 調査地周辺遺跡分布図	図8 1号溝址実測図
図3 調査区全測図	図9 2号溝址実測図ならびに出土土器実測図
図4 1号住居址実測図	図10 土壌実測図
図5 1号住居址出土土器実測図	図11 9号土壌出土土器実測図
図6 2号住居址実測図ならびに出土土器実測図	図12 検出面出土土器実測図

第1章 調査経過

1 調査に至る経過

長野市上駒沢地籍は、地形的には浅川扇状地扇端付近に位置する。現在周辺の宅地開発は激しく旧地形の復元は困難であるが、北西から南東へ傾斜する地形の大部分が畑地や果樹園として利用され、もっとも低位置となるJR信越線以南に水田が展開する。

平成4年長野電鉄株式会社は、事業面積約1,520㎡にわたる長野電鉄上駒沢住宅地(2)の造成事業を計画した。

事業予定地は周知の「浅川扇状地遺跡群 駒沢新町遺跡」の範囲内に位置するため、長野市教育委員会は長野電鉄株式会社の委託を受け、事前に埋蔵文化財の有無を確認するために平成4年12月24日試掘調査を実施した。

調査は事業予定地の任意の地点2か所に試掘坑を掘削したが、ともに遺物包含層の存在を確認した。

この結果により、宅地造成事業の着手に際して、掘削等の工程により埋蔵文化財に破壊のおよぶ可能性の高い道路造成部分約400㎡について、記録保存を前提とした発掘調査の必要性が確認されるに至った。

調査は平成5年1月11日～20日までの間の実質4日間にわたって実施した。

2 調査体制

調査主体者	長野市教育委員会教育長	奥村 秀雄
総括責任者	市埋蔵文化財センター所長	小山 正
庶務係	〃 所長補佐	山中 武徳
	〃 職員	青木 厚子
調査係	〃 調査係長	矢口 忠良
	〃 主査	青木 和明
	〃 主事	千野 浩
	〃 主事	飯島 哲也
	〃 専門員	中殿 章子
	〃 専門員	横山 かよ子
	〃 専門員	笠井 敦子
	〃 専門員	山崎 佐織
	〃 専門員	山田 美弥子
	〃 専門員	寺島 孝典
	〃 専門主事	小松 安和
	〃 専門主事	羽場 卓雄
	〃 専門主事	太田 重成

参加者 小林さと 宮沢けさよ 小林志げる
横山ふじ江 佐藤ひで子 新津三千子 佐藤君江
佐藤はま 佐藤幸子 成田敦子 金子ゆき



調査地全景

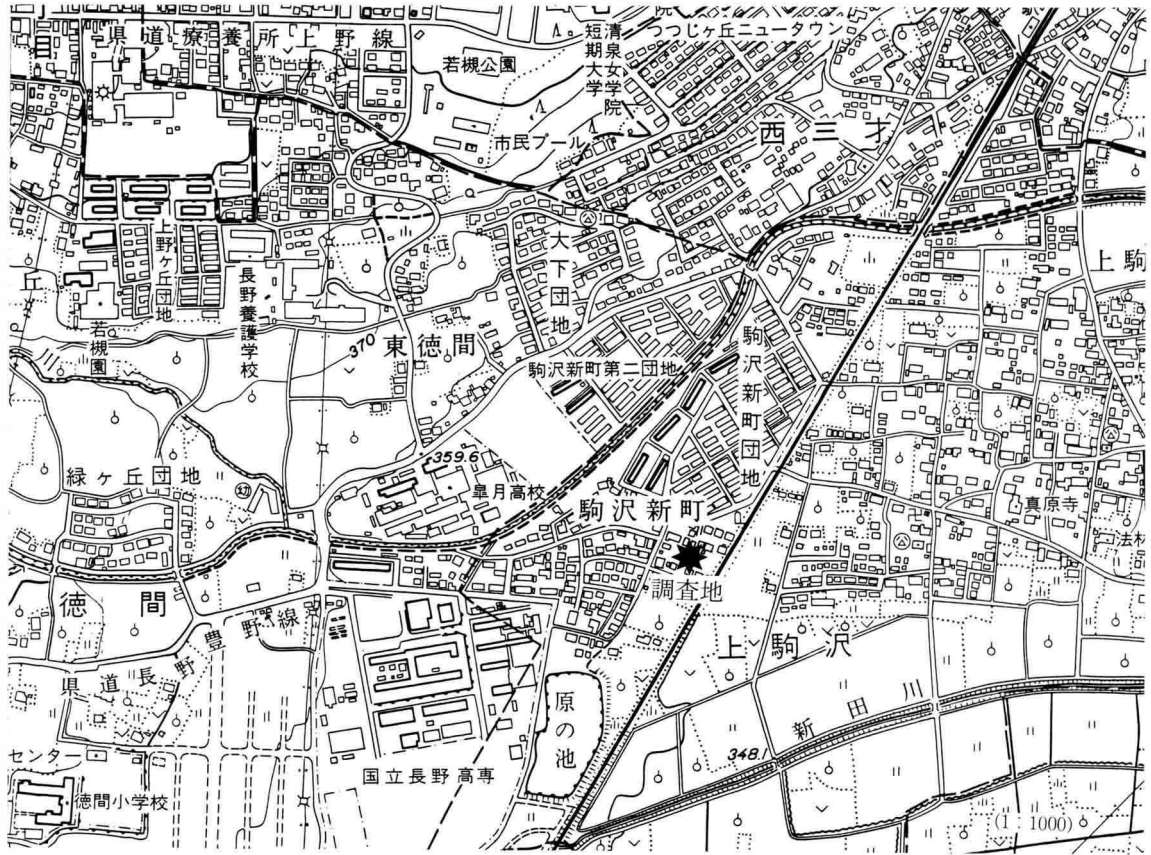


図1 調査地ならびに調査地周辺の地形

第2章 調査地周辺の考古学的環境

飯綱山を水源とする浅川は山間部を侵食流下した後、浅川東条地籍の通称浅川原口を谷口として盆地に流入し、東南方向を主軸とした平均斜度1/45を計測する典型的な扇状地を形成する。この扇状地上には多くの遺跡が存在し、長野市内でも有数の規模を誇る「浅川扇状地遺跡群」として把握されている。以下浅川扇状地遺跡群の代表的な遺跡について概説し、周辺の考古学的環境としたい。

旧石器時代は、浅川源流に近い猫又池・大池に遺跡が確認されているが扇状地上にはその存在は確認されていない。

続く縄文時代には、湯谷・赤萱平・刈田・牟礼バイパスA地点・徳間榎木田・浅川端の各遺跡が確認されている。これらはともに駒沢川と、浅川流域に集中する傾向が認められ、正式調査を受けた遺跡としては前者に牟礼バイパスA地点遺跡、後者に浅川端遺跡がある。牟礼バイパスA地点遺跡では前期前葉の住居址1軒、浅川端遺跡では同じく前期前葉の住居址1軒、土壌1基が検出されている。

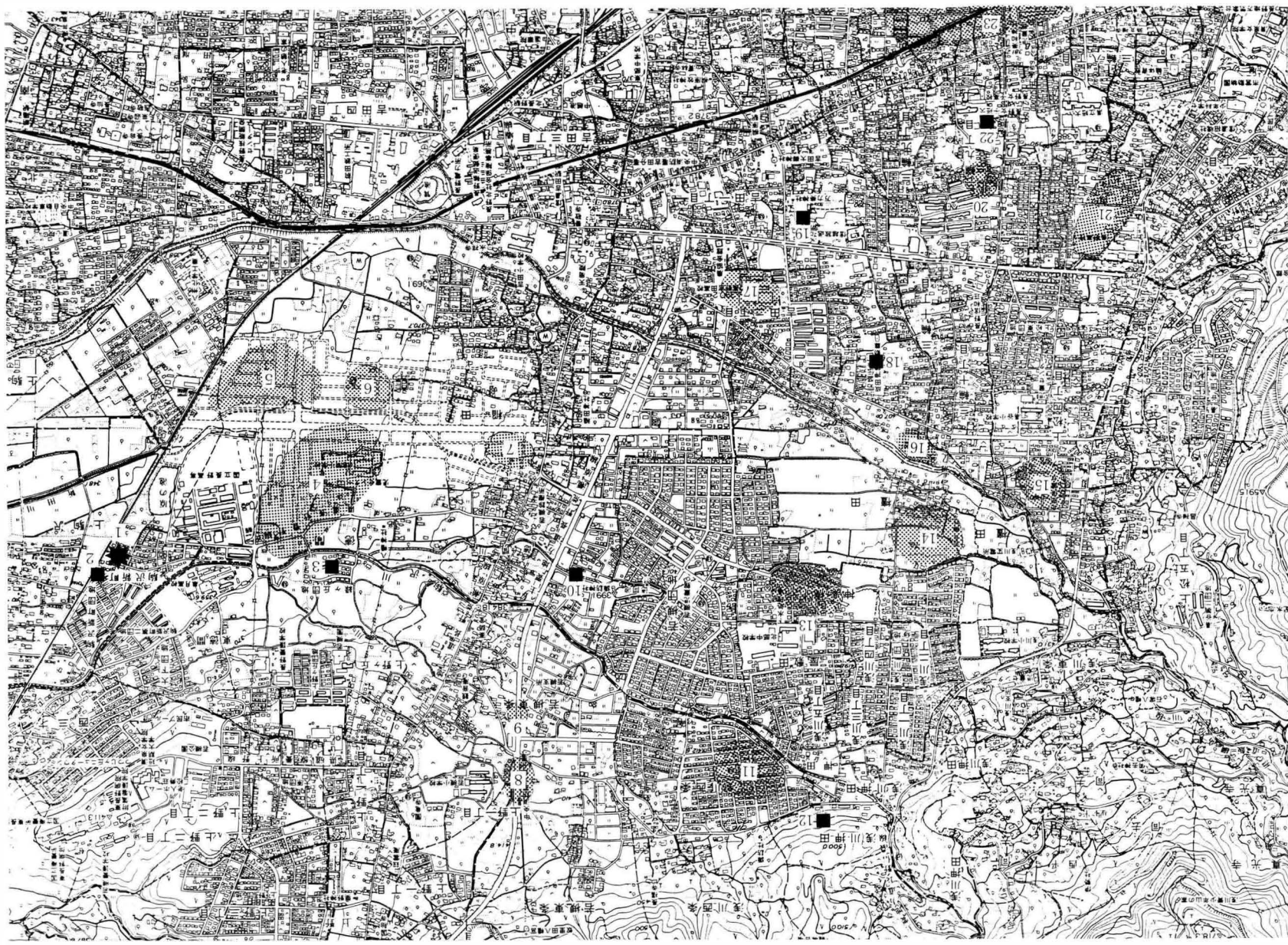
浅川扇状地の本格的な開発は次ぎの弥生時代から始まったものといえる。主要な遺跡には徳間小学校遺跡・二ツ宮遺跡・本堀遺跡・牟礼バイパスD地点遺跡・神楽橋遺跡・浅川端遺跡・吉田高校グランド遺跡等がある。徳間小学校遺跡では中期終末の住居址2軒が検出されているが、二ツ宮遺跡・本堀遺跡では中期後半の住居址、溝土壌等が検出されている。牟礼バイパスD地点遺跡では中期栗林式期の住居址4軒・土壌1基、浅川端遺跡では同時期の住居址2軒・土器集積1が検出されているがともに従来不明瞭であった栗林式前葉のもので、良好な資料といえよう。吉田高校グランド遺跡は後期初頭吉田式土器の標識遺跡で、特に第3次調査では住居址10軒からなる当該期の単一集落が良好な状態で検出されている。また二ツ宮遺跡では吉田高校に継ぐ時期の単一集落が検出されており今後の集落遺跡研究に良好な資料を提示している。後期後半の箱清水式期の遺跡はその存在が希薄であり、少なくとも現状では中期～後期初頭の大規模集落と箱清水式期の大規模集落とが分布上一致することはない。この状況が善光寺平の他の地域にもそのままあてはまるか否かは不明であるが、その背後には生産もしくは生活様式の差異といった根本的な要因が認められる可能性もあり今後の重要な検討課題である。

古墳時代に入り浅川扇状地を特徴付けるのは中期集落の展開であろう。有名な駒沢祭祀遺跡をはじめとして、近年牟礼バイパスB地点遺跡・下字木遺跡・二ツ宮遺跡など良好な集落遺跡の検出例が増えており、その集中度は善光寺平の中でも特異である。さらにこれらの諸遺跡では陶器編年I型式2段階～4段階に対応すると考えられる古手の須恵器が比較的集中して出土する傾向が顕著であり、この点も善光寺平の中では特徴的である。犀川以北の盟主的な古墳群である地附山古墳群の保有した多量の須恵器の存在を合わせ考えると、当該期における浅川扇状地の重要性がにわかにクローズアップされてこよう。

古墳時代後期～平安時代にかけては比較的継続して集落が展開する。浅川西条遺跡・牟礼バイパスB・C・D地点、三輪遺跡などが代表的な遺跡といえよう。ただし大規模集落が長期間にわたって同一箇所に存在するのではなく、時期ごとに立地を異にしつつ中核的な集落が形成されている可能性が高い。

また平安時代末期にはこの地域に信濃28枚のうちの吉田牧が設けられており、駒弓・桐原牧神社や駒沢などはその名残と考えられ、広大な扇状地は好適な放牧地であったと考えられる。

中世にはこの地域は若槻庄の領域となり、若槻里城をはじめ本堀・押鐘・桐原・相ノ木・平林・和田などの城館址が存在する。



- 1 調査地 2 駒沢祭祀遺跡 3 古屋敷遺跡 4 柳田遺跡 5 ニッ宮遺跡 6 本堀遺跡 7 稲添遺跡
- 8 車礼バイパスB地点 9 車礼バイパスA地点 10 徳間古墳群 11 浅川西条遺跡 12 赤萱平遺跡
- 13 神楽橋遺跡 14 檀田遺跡 15 湯谷古墳群 16 浅川端遺跡 17 吉田高校グラウンド遺跡 18 盛伝寺居館址
- 19 押鐘城址 20 下宇木遺跡 21 本村東沖遺跡 22 相ノ木城址 23 三輪遺跡

図2 調査地周辺遺跡分布図

第3章 調査

1 調査概要

今回の調査では、住居址4軒・土壇9基・溝址2本を検出した。もっとも時期のさかのぼるものは2号住居址で、奈良時代の所産であり他は平安時代に属する。

遺構の分布は調査区北西に偏り、調査区南東は地形的に落ち込むようであり、若干の土器破片を検出したのみで遺構の分布は確認されなかった。

1号溝址が南東方向へどのようにのびるのか、上層からの攪乱のために確認しえなかったが、この溝址が集落域を画している可能性も考えられる。

昭和43年度に実施された第1次調査の結果よりしても、奈良・平安期の集落の主体は本調査区より北西方向に展開するものと予想され、本調査区は当該期集落の南東端付近に位置するものと考えられる。しかし限られた調査範囲ではあるが4軒の住居址が検出されており、その密集度は注目すべきであろう。

本調査区北東50mの地点には、著名な駒沢祭祀遺跡が存在するが、今回の調査では古墳時代の遺構は検出されていない。

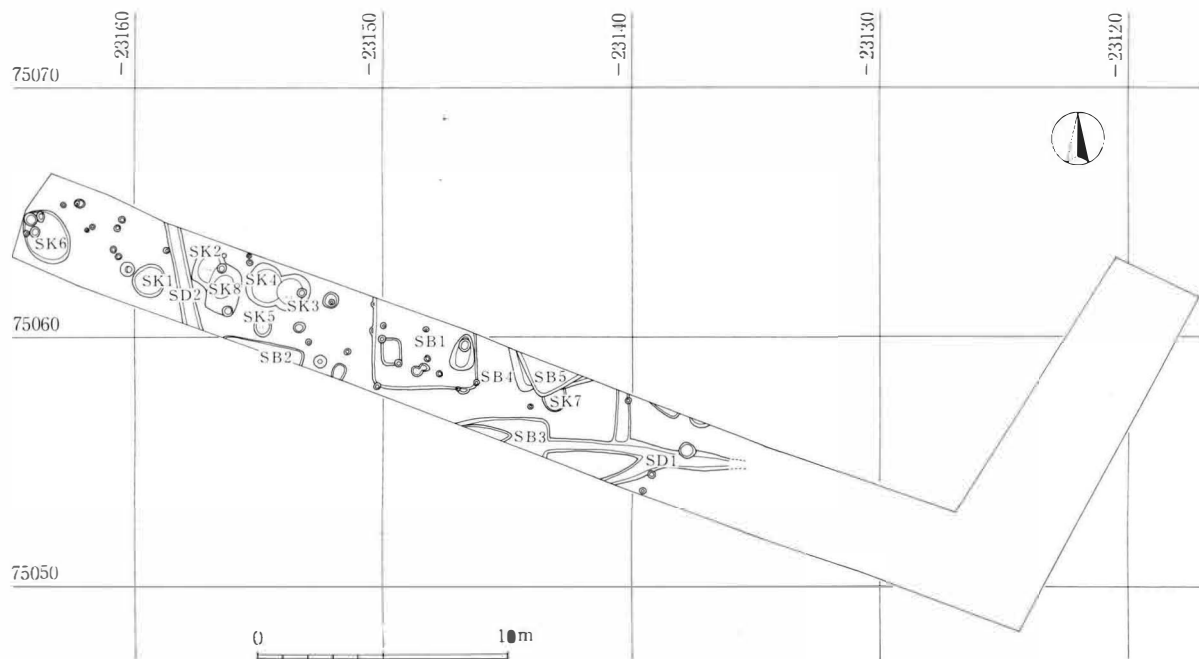


図3 調査区全側図 (1 : 300)

2 遺構と遺物

1号住居址 (図4・5)

住居址北側1/2程が調査区外となるが、他遺構との切りあい関係はない。平面プランは一辺4.20mほどの隅丸方形住居址と予想される。確認面からの掘り込みは平均15cm前後と浅い。床面は地山の砂礫層を掘り込んでいたために、軟弱で不明瞭なものである。また、床面は住居址中央部分が高く、周辺ならびに壁際はやや落ち込み平坦ではない。柱穴はP1～P10までを検出している。配置や掘り込み規模等より本住居址に直接伴うものである可能性が高いものとしてはP1～P4・P8があるが、柱穴配列等の詳細は不明である。また壁際に検出されているP13～P17などは支柱としてとらえられる可能性もある。P11・P12は土壇状の掘り込みであるが性格不

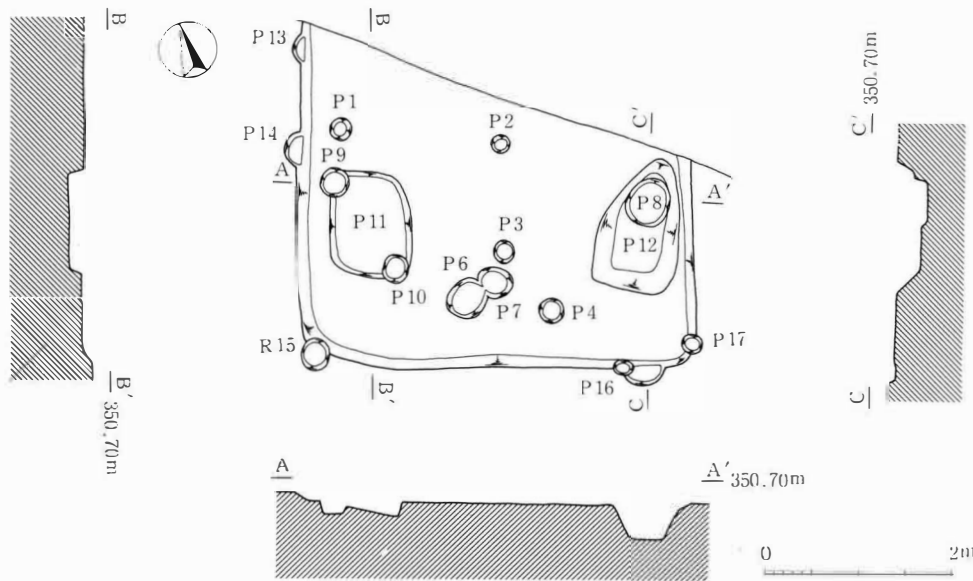


図4 1号住居址実測図（1：80）

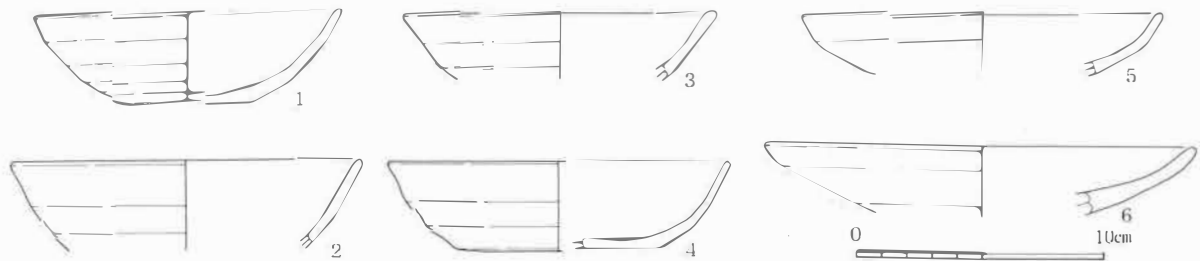


図5 1号住居址出土土器実測図（1：3）

明である。P12は深さ30cm程で掘り込みはしっかりしている。カマド等その他の施設は検出されていない。P3・6・7の周辺の床面上には焼土が顕著に認められたが床面は焼け締まっていた。

出土土器には土師器杯（1～4）・皿（5・6）がある。杯（1・2）は内面黒色処理がなされるが、他はロクロナデによる調整のみである。底部の切り放し技法は、確認できるものはすべて回転糸切り技法である。

出土土器より平安期の住居址と考えられる。

2号住居址（図6）

大半が調査区外となり、住居址北壁の一部を確認したにすぎない。平面プランは一辺3.30mほどの隅丸方形住居址と考えられるが詳細は不明である。確認面からの掘り込みは5cm前後と浅く、床面は軟弱である。カマド・柱穴等の施設は確認していない。床面より炭化材ならびに炭化物が多量に出土しているが、床・壁等は焼けて

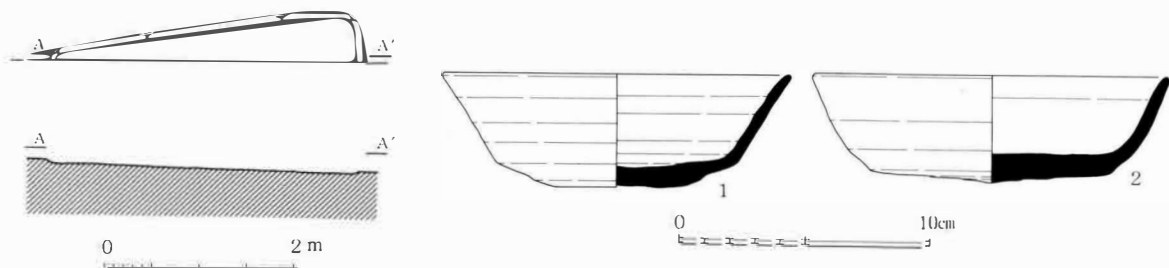


図6 2号住居址実測図（1：80）ならびに出土土器実測図（1：3）

いない。

出土土器には須恵器坏（1・2）がある。底部の切り放し技法はともに回転篋起しである。体部はロクロナデ調整されるのみでケズリ等はなされない。出土土器の様相より奈良時代の住居址と考えられる。

3号住居址（図7）

4号住居址に大半を切られ、また大部分が調査区外となるため詳細は不明である。確認面からの掘り込みは30cm前後と深い、床面は軟弱で不明瞭である。土師器・須恵器の破片が出土しているが、本住居址調査中に4号住居址の存在を確認したために遺物は混入の可能性があり、明確な時期比定は困難である。おそらく平安期の住居址であろう。

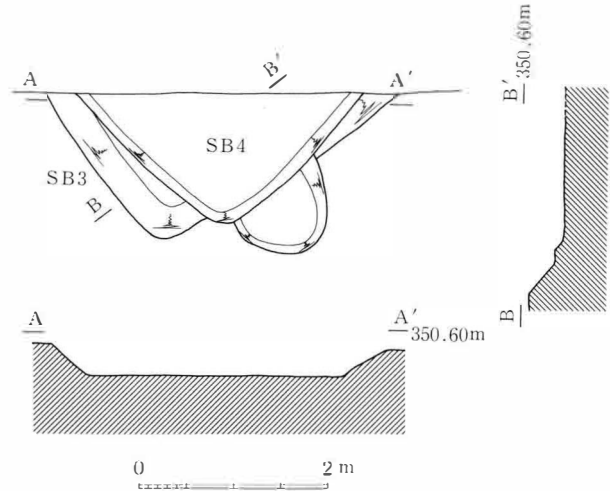


図7 3号・4号住居址実測図

4号住居址（図7）

3号住居址を切って構築されるが北側は大半が調査区外となり、3号住居址同様詳細は不明である。平面プランは隅丸方形住居址と予想されるが、規模は不明である。確認面からの掘り込みは40cm前後と深い、床面は軟弱で不明瞭である。覆土内より平安時代の土師器・須恵器破片が比較的少量に出土しているが、図示しうるものはない。出土土器より平安時代の住居址と考えられる。

1号溝址（図8）

調査区南東端にて検出されたもので、検出された長さは約7.50mである。中央付近より南北二つの溝に分かれるが、ほぼ東西方向に直線的に延びる形態を呈する。確認面での幅は50~70cm、溝底幅は30cm前後である。確認面からの掘り込みは15~20cm程と浅く、断面は逆台形状を呈する。

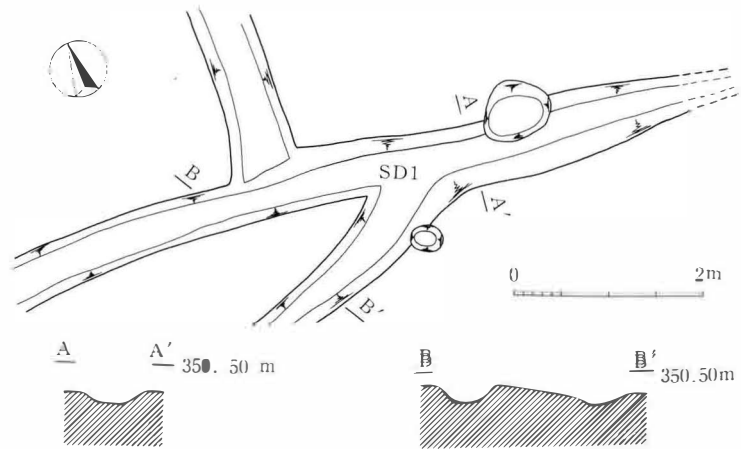


図8 1号溝址実測図（1：80）

本溝址より東側は旧地形が落ち込むようであり、遺構の存在が確認されていないことよりすれば、本溝址が当該期集落の南東端を画していた可能性も考えられる。覆土内より平安時代の土師器・須恵器破片が出土しているが図示しうるものはない。また平安時代末期の土師器坏を出土した9号土壌に切られることよりすれば、本溝址も平安時代の所産と考えられよう。

2号溝址（図9）

調査区西側で検出されたもので、検出された長さは約4.20mである。南北方向に直線的に延びる形態を呈する。南側は中位に段を有し、掘り込みが二段にわたる。確認面での幅は60~70cm、溝底幅は20~30cm程である。確認面からの掘り込みは平均35cm前後と比較的深く、断面は逆台形状を呈する。

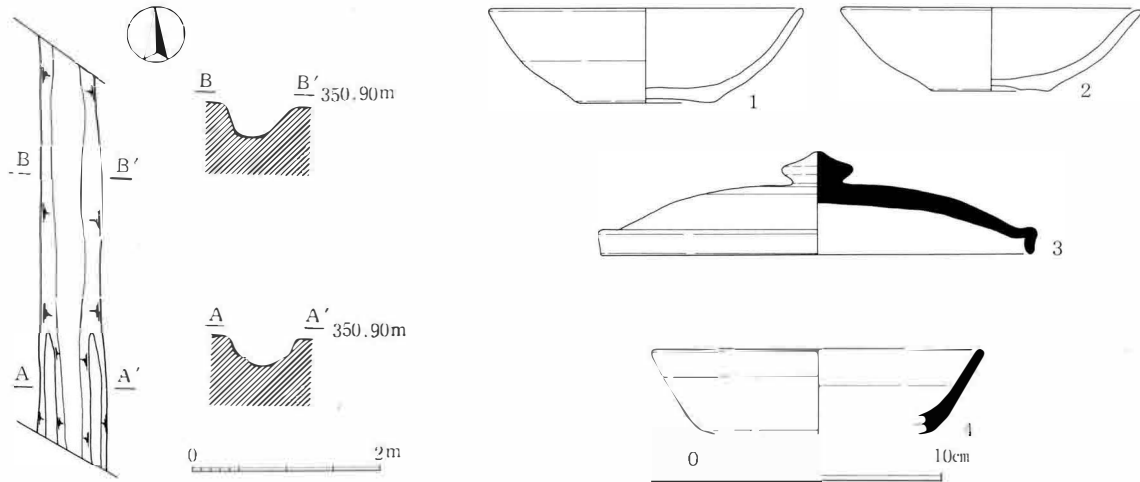


図9 2号溝址実測図（1：80）ならびに出土土器実測図（1：3）

溝底に接した状態で土師器坏（1・2）が、覆土内より須恵器坏（4）・蓋（3）が出土している。土師器坏はともにロクロナデ整形され、底部切り放しは回転糸切りである。須恵器蓋は天井部に2帯の回転篋ケズリがなされるが、他はロクロナデである。出土土器の様相より平安時代の所産と考えられる。

1号土壌（図10）

径1,30mほどの円形土壌で、確認面からの掘り込みは平均15cm程である。覆土に焼土を若干含んでいた。土師器小破片が出土しており、平安時代の所産と考えられる。

2号土壌（図10）

8号土壌に東側を切られる。平面プランは長軸1,60m・短軸1,10mのやや不整な隅丸長方形を呈する。確認面からの掘り込みは30cm前後である。須恵器・土師器小破片が出土しており、平安時代の所産と考えられる。

3号土壌（図10）

径1,50mほどの円形土壌で、4号土壌を切って構築される。確認面からの掘り込みは20cm前後である。内部に小ピットを検出しているが、本土壌に直接伴うものか不明である。出土土器はなく時期不明である。

4号土壌（図10）

径1,60mほどの円形土壌で、3号土壌に東側を切られる。確認面からの掘り込みは15cm前後である。出土土器なく時期不明である。

5号土壌（図10）

径0,70mほどの円形土壌である。確認面からの掘り込みは20cm前後である。土師器・須恵器の小破片が出土しており、平安時代の所産と考えられる。

6号土壌（図10）

調査区西端で検出された土壌で、長軸2,10m・短軸1,70mほどの楕円形を呈する。確認面からの掘り込みは10cm

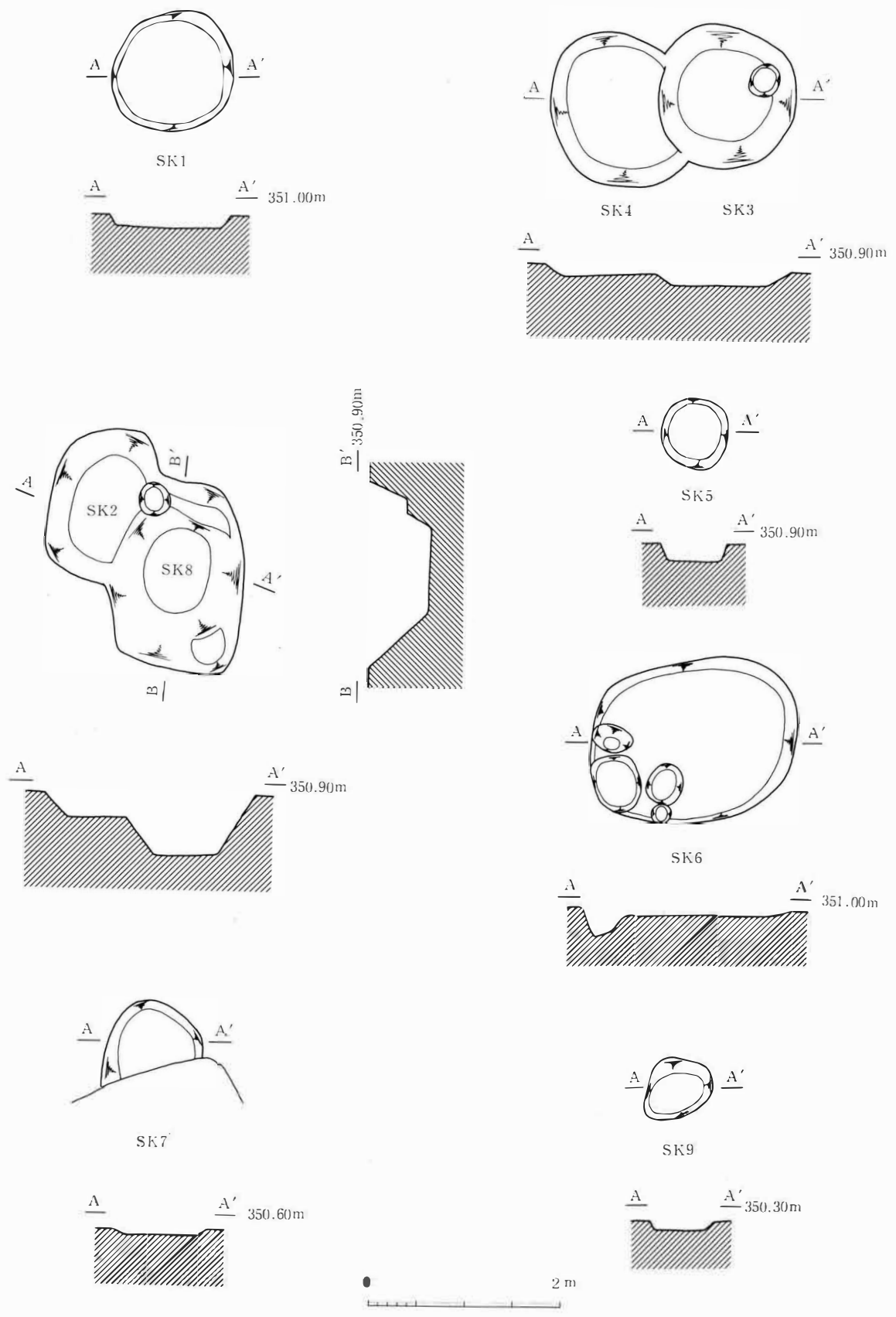


图10 土壤实测图

前後と浅い。内部に小ピットを4本検出しているが、本土壌に直接伴うものか不明である。土師器破片が出土しており、平安時代の所産と考えられる。

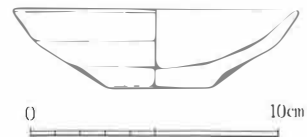


図11 9号土壌出土土器実測図

7号土壌 (図10)

北側を4号住居址に切られる。径1,00mほどのやや不整な円形土壌と考えられる。確認面からの掘り込みは10cm前後と浅い。出土土器はなく、時期不明である。

8号土壌 (図10)

2号土壌を切って構築される。長軸2,00m・短軸1,40mほどのやや不整な隅丸長方形を呈する。北側は中位に段を有し、二段にわたる掘り込みがなされる。確認面からの掘り込みは70cm前後と深く、下層の砂礫層を掘り込んでいるために調査中に湧水をみた。土師器・須恵器破片が比較的多量に出土しているが、図示しうるものはない。出土土器の様相より平安時代の所産と考えられる。

9号土壌 (図10・11)

1号溝址を切って構築される。径60cmほどの不整な円形土壌で、確認面からの掘り込みは50cm前後である。底面より土師器坏(図11)が出土している。体部はロクロナデ調整、底部の切り放しは回転糸切りである。出土土器より平安時代の所産と考えられる。

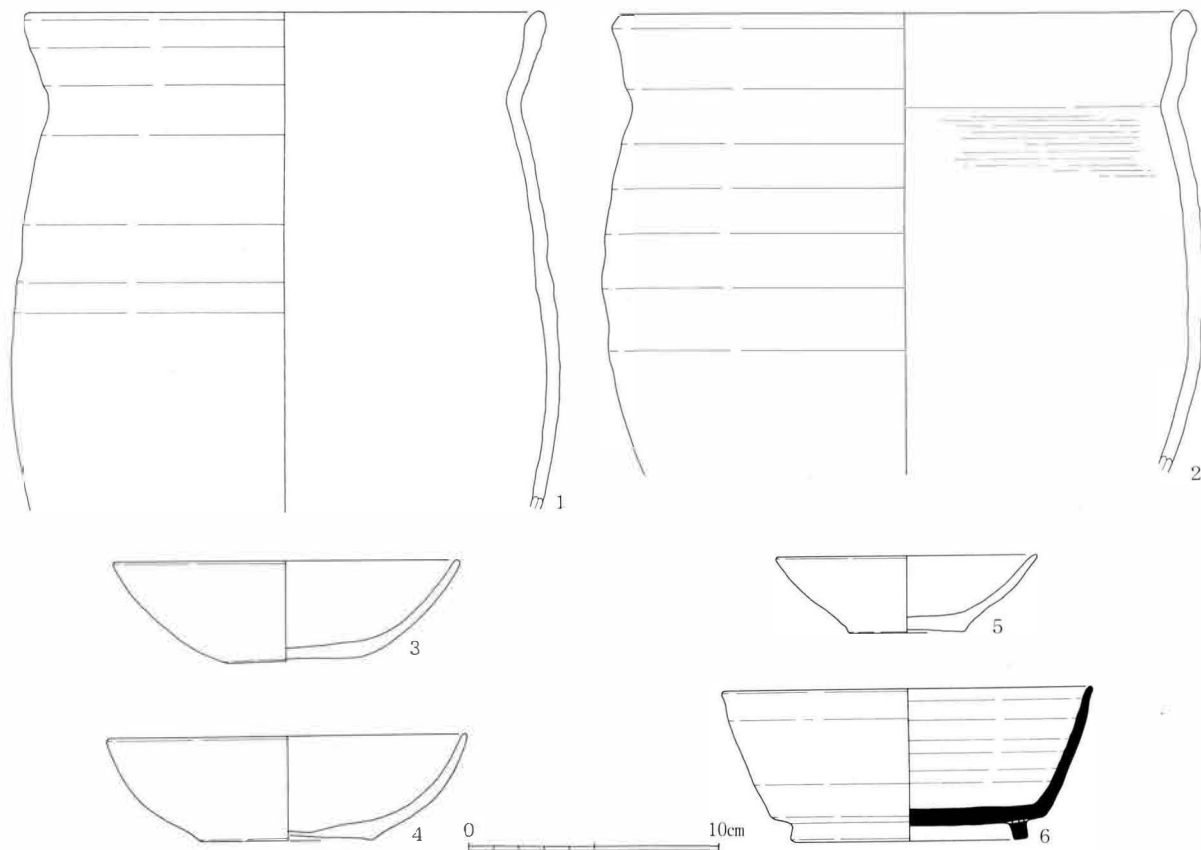


図12 検出面出土土器実測図

3 調査のまとめ

以上のように今回の調査では、住居址4軒・土壇9基・溝址2本を検出した。奈良時代に比定される2号住居址を除いては、いずれも平安時代のものと考えられる。

今回の調査地より西北50mほどのところに位置する第1次調査地点でも、平安期の住居址が10軒検出されており、本調査地が当該期集落の南東端と把握することが可能であるならば、径100mほどの範囲内にかなり密集度の高い平安期集落の存在を想定することが可能であろう。

しかし今回の調査は、想定される遺跡範囲からすればそのごく一部に試掘坑を設定したに過ぎない。本地域の考古学的研究はすべて今後の課題である。今回の宅地造成事業のように、本地域にも新たな開発の波が押し寄せてきている。本書がそうした開発行為との協調のもとにこの地域に存在する貴重な埋蔵文化財保護の一助となることを願いたい。

最後に埋蔵文化財保護に対して深いご理解を頂き、絶大なご協力を賜った長野電鉄株式会社、厳寒のさなか調査への協力を惜しまれなかった参加者の皆さん、ならびに調査から整理・報告書作成にいたるまで、ご指導ご協力を賜った関係者各位に心から感謝申し上げ調査の総括としたい。



調査地全景



1号住居址



2号住居址



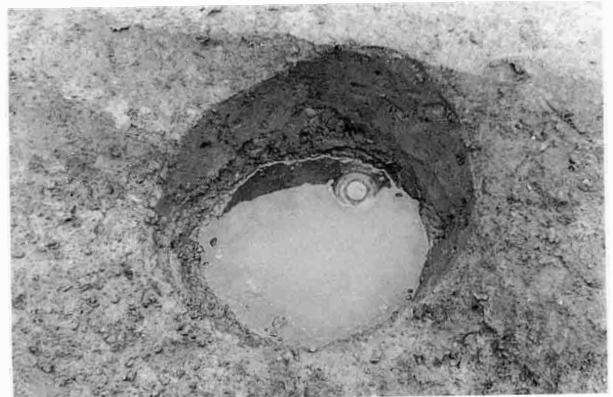
3号・4号住居址



3号・4号土壙



2号・8号土壙



9号土壙



1号溝址



2号溝址

長野市の埋蔵文化財第55集

駒沢新町遺跡Ⅱ

平成5年3月25日 印刷
平成5年3月30日 発行

編集 長野市教育委員会
発行 長野市埋蔵文化財センター
印刷 奥山印刷工業株式会社